

手習ばかりに精を入れたるものは、物毎に疎く見えけるが、自然と大氣に生れつき、江戸廻しの油、寒中に氷らぬ事を分別仕出し、樽に胡椒一粒づゝ入れる事にて、大分利を得て、年をとりける、  
〔皇都午睡三編上〕江戸市中略○中 佛事等勤る内へ、油一升とか二升とか、小樽に入て遣ひ物とする、  
○中 都て跡の埒よき事のみをまたるものなり、

〔萬寶鄙事記火三〕燈油はなる程あたひ高直に能を用べし、燈心すくなくしても光り明らかなり、毎日油つきを掃除してこげを去べし、まからざれば皿やけて油減る、そのうへひかりあきらかならず、

菜の實の油は久しく成たるがよし、光り明らかにして減る事すくなし、新しき油はひかりうすくして減り多し、

薪  
名稱

〔倭名類聚抄燈火具二〕薪 纂要云、火木曰薪音新、和名多岐々々

〔倭訓栞前編十三〕たき、和名抄に薪をよめり、萬葉集に燎木と見え、海東諸國記に燒木と書り、

歌に専ら冬によめるはみかまぎの故也、全浙兵制に載る歌、

みちのくのしのぶのさくら折そへて薪はおもき春の山びと、薪をこるとよめるは、世尊雪山の遺意也、薪つきにしとよめるは、世尊入滅のことなり、

〔年中行事歌合〕八番 左 御薪 正月十五日 家尹朝臣

百敷のもゝの司のみかまぎに民のけぶりもにぎはひにけり

〔皇都午睡三編上〕上方にて買て來るを、江戸にては買て來る、○中 薪割木を薪まき

〔飛州志二〕柴薪附 國名

本土常用ノ薪也、通稱ヲ載ス、柴 柴木ト云イ穂枝ト云フ、又穂木トモ云ヘリ、凡テ枝葉トモニ用ル小木也、他州ニテ鹿朶ト云フニ同ジ、薪 木呂ト云イ楯ト云フ、又春木ト云ヘリ、共ニ總名